実践報告『オープン・カレッジ“きんちゃい みまさかれっじ”』

薬師寺明子・大手裕美子・奥山祐可・坂手菜央・高須将裕
中尾彰太・永瀧良子・原本侑季・春名翔太

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第62号抜刷）

美作大学・美作大学短期大学部紀要
2017, Vol. 62. 63〜72

報告・資料

実践報告『オープン・カレッジ“きんちゃい みまさかれっじ”』

An activity report of the “Kinchai Mimasaka Open College”

薬師寺明子・大手裕美子・奥山　祐可[1)]・坂手　菜央[2)]・高須　将裕[3)]
中尾　彰太[4)]・永瀧　良子[5)]・原本　侑季[6)]・春名　翔太[7)]

キーワード：オープン・カレッジ、 知的障害のある人、大学、学生、ゼミ活動

1．はじめに

近年、高等学校卒業後の大学・短大進学率が 50%を超えている。また、多くの人が市民講座や老人大学、カルチャーセンター等で生涯学習、生涯教育等として学ぶ機会を得ている。しかし、知的障害のある人の場合は特別支援学校卒業後、大学等の高等教育を受ける機会がないのが現状である。学習機会の少ない知的障害のある人を大学に招き、講義を受けてもらうという取り組みのことをオープン・カレッジという。オープン・カレッジは 1995 年、東京学芸大学において、大学教員や付属養護学校(現在は特別支援学校)、多摩地域の養護学校教員の教員等で構成している「養護学校進路指導研究会」が、特別支援学校を卒業した知的障害のある人を対象に大学公開講座「自分を知り、社会を学ぶ」を開講したのが始まりである。1998 年に大阪府立大学安藤研究室がオープン・カレッジとして活動を始め、活動に賛同した大学関係者を中心に広がりを見せ、1999 年度には武庫川女子大学、2000 年度には桃山学院大学が開講した。その後、宮城大、徳島大等でも開講し全国的に広がった[1)2)]。

オープン・カレッジには三つの理念①知的障害者の人権(教育を受ける権利)の保障、②知的障害者の変化(発達)の可能性の保障、③地域社会に対する大学の貢献がある。オープン・カレッジは知的障害のある人に、ただ学ぶ場を提供するだけではなく、「教育権」や「発達保障」について実践を通して実現しようとする取り組みである。

本報告では、知的障害のある人のオープン・カレッジの取り組みに共感した学生が、実際にオープン・カレッジを立ち上げ、実践していく過程についての報告を行う。そして、実践から課題を明らかにし、今後の活動を継続、向上していくための検討を行う。

2．オープン・カレッジについて

2－1 他大学の取り組み

オープン・カレッジは、大阪府立大学安藤研究室によって 1998 年に開催され、全国の大学に広がった[1)2)3)4)5)]。文献等にあった他大学で行っているオープン・カレッジの取り組みついて、主なものを以下の表にまとめた。

表1 オープン・カレッジの実践状況

大学	オープン・カレッジ名	これまで実施した主な講義内容
大阪府立大学	知的障害のある人の大学	障害者福祉論・グループワーク論・料理・芸術・スポーツ
関西福祉大学	オープン・カレッジin KUSW	社会福祉学・看護学・健康科学
東北大学	杜のまなびや	生涯発達心理学・自分他社の生き様を聞く・発達障害・環境問題・仕事
静岡英和大学	はぴねす☆EIWAカレッジ	スポーツ文化論・余暇と健康・からだの健康・こころの健康・食と健康
拓殖大学	元気カレッジ、ふれあいカレッジ、にじいろキャンパス	おもちゃ学・コンピューター入門・フラワーアレンジメント
賢明女子短大		健康科学・経済学・英会話
島根大学	知的に障害のある人のオープンカレッジin松江	英会話・美術・音楽・歴史学等

1）株式会社パソナ岡山、　2）特定非営利活動法人 color、
3）株式会社アイアイ、　4）社会福祉法人陽気会、
5）特定非営利活動法人東備、　6）社会福祉法人泉学園、
7）社会福祉法人法人経山会

2－2　島根大学

島根大学は「知的に障がいのある人のオープン・カレッジ in 松江」を実施している。法文学部福祉社会コースの学生と地域の福祉関係者による「オープン・カレッジ実行委員会」が企画・運営をしており、松江市社会福祉協議会、松江市教育委員会、社会福祉法人松江友愛会が共催・後援している。2008 年 10 月に 1 期生 24 名を受け入れスタートした。講義内容は歴史学、英会話、音楽、美術等の学内での講義や奥出雲ワイナリーの見学等幅広い。オープン・カレッジ実行委員会は法学部福祉社会コースの学生で組織され、総括(実行委員長)、受講者係、講師係、サポーター係、情報・会計係があり、週 1 回のスタッフ会を行い、実施に向けて活動している。

受講者の募集については、受講者係りが実施約 4 ヵ月前に受講者募集を行う。受講希望が多い場合、1 ヵ月前に希望者の前で公開抽選会を行っている。そして、受講者決定後にオープン・カレッジの詳細な資料「開催のお知らせ」や「受講者のみなさんへ」を発送している。

講師依頼については講師係が、実施 5 ヵ月前から講師の選考、依頼を行う。決定後は講師との講義内容の打ち合わせ、シラバス作成等の準備を行う。

オープン・カレッジ当日、受講者に担当の支援者「サポーター」が配置される。サポーターは実行委員のサポーター係が実施 4 ヵ月前から学内にサポーター募集のポスター掲示や、部活やサークルへのチラシ配布、以前にサポーター経験のある人に依頼をする等の方法で募集を行う。また、地域の人にもサポーター募集を呼び掛け、他大学の学生や社会人等がサポーターを担ってくれている。サポーターとなった人には作成した「サポーターのしおり」を配布する。当日は受講者係と協力し、受講者とサポーターのマッチングを行う。なお、実施当日にはボランティア保険に加入している。

オープン・カレッジの運営に際し、開催を地域に広めていくため、共催や後援、スポンサーを募集している。情報・会計係が実施 5 ヵ月前から共催・後援依頼や松江市にある企業にスポンサーの依頼を行っている。松江市手をつなぐ育成会や松江市教育委員会等が共催、後援となっている。スポンサーは福祉関係の企業や学内に設置している自動販売機の会社に依頼し、オープン・カレッジの際にアピールタイムを設けたり、ポスターやチラシに広告を掲載している。そして、受講者の交流会での茶菓子や湯茶にスポンサーから提供された品物を使用している。また、松江市社会福祉協議に「松江市社会福祉協議会篤志配分金」の申請を行う等、運営予算の 4 分の 3 が補助金で賄われている。そして、新聞社に取材依頼を行い、オープン・カレッジの周知を行っている。島根大学のオープン・カレッジは共催、後援スポンサーの力が大きな役割を担っている。

3．美作大学の学生によるオープン・カレッジの実践内容

薬師寺ゼミは「実践を通して学ぶ」ことを柱として、これまでいくつかの実践を行ってきた。「美作福祉部隊リカイヒロメタインジャー」[6)7)]、「知的障害のある人の本人の会」[8)]、「美作地域コミュニティビジネスプラン・コンテストへの参加」[9)]、「発達障害のある人を対象としたオープン・カレッジ」[10)]等がある。学科 13 期生の薬師寺ゼミの学生は「知的障害のある人のオープン・カレッジ」ついて興味を持ち、実践することとなった。

3－1　事前学習

ゼミの学びの中で前述したような、これまで実施されてきた「オープン・カレッジ」の展開や他大学の取り組みについて学びを深めた。学びの中で、実践している大学に直接赴き、学んでみたいということになり、島根大学での視察研修を行った。

島根大学のオープン・カレッジの実施が年度末月と日程が合わなかったため、直接の見学はできなかったが、島根大学の実行委員の学生にオープン・カレッジについて詳しく話を聴くという形で行った。なお、薬師寺研究室の取り組み等の発表も行った。その後、学外で懇親会も行った。この交流がきっかけとなり、島根大学の京研究室やコースの学生との交流を毎年行っ

ている。

島根大学の学生のからの報告後、美作大学の学生からオープン・カレッジを始めた背景や、やりがい、得たこと、気を付けていること、参考にしたこと等を積極的に質問した。島根大学の実行委員からは、「実際に参加者と関わることで、普段できないことを経験することができ、受講者が大学の雰囲気を味わっている姿がとても印象的」、「気を付けないといけないこととして、知的障害だけでなく、身体障害と重複している参加者もいるので、エレベーターや手すりのある校舎を使用する等、その人に合わせた配慮が大事」等との意見を得た。その後6名程度のグループとなり、より詳しく話を聞くことができた。

写真：島根大学での様子

3－2　オープン・カレッジ実践準備

「学習機会の少ない方を大学に招いて講義を受けてもらうという活動です。大学の講義で得た知識や経験を基に、地域でいきいきとした生活を送ることができるように取り組んでいます」という活動の目的を決めてスタートした。

1）名称の検討

「みんなに来てほしい」ということで大学のある津山の方言「きんちゃい」を入れ、美作大学でオープン・カレッジを実施するということで、「みまさかだいがく」と「オープン・カレッジ」を繋ぎ合わせて「みまさかれっじ」とした。最終的に決定した名称は“きんちゃい みまさかれっじ”である。

2）日程と講義時間の検討

1年を1クールとし、年に4回(前期2日、後期2日)開催する。受講者は成人であり、1週間に1日ずつ2週にわたって開催することで、休日を確保できるよう配慮し、以下の日程になった。

前期　：　2015年 5 月16日（土）・23日（土）
後期　：　2015年11月14日（土）・21日（土）

講義時間は集中力が保てる時間を考え、各講義は1時間、午前午後に各1講義とした。

3）広報活動

①フライヤーの作成と配布

前期フライヤー

後期フライヤー

オープン講座フライヤー

フライヤー配布先は「手をつなぐ育成会」や津山市内の事業所（就労継続支援Ａ型、Ｂ型、就労移行支援、障害者支援施設）であった。また、後期講義の一部をオープン講座にしたため、夏季休暇中に実施する４年次の実習先や10月に開催された白梅祭でも配布した。

②ＣＭの作成

地域生活科学研究所主催の「発達障害のある人を対象としたオープンカレッジ」をテーマとしたシンポジウムが2014年２月に開催された。宣伝用のムービーを作成しシンポジウムの最後にＣＭを上映し、宣伝した。

③ＳＮＳの活用

2015年12月からFacebookを立ち上げた。より多くの人に活動について関心を持ってもらえるようにＳＮＳを使った広報活動を行った。他にも大学広報室の協力を得て大学のホームページに活動内容やオープン講座を含めた開催日程を掲載した。

４）講義内容の検討

座学中心の全体講義と体験型の選択講義を設けることにした。また、両期に交流会も実施することとした。

前期　：　１日目「文化人類学」（全体講義）
　　「英会話」「音楽」（選択講義）
　　２日目「料理」・交流会

後期　：　１日目「工作」「悪質商法対策講座
　　～あきらめない～」
　　２日目「科学実験」・交流会

後期については、２日間とも知的障害のある人だけではなく、一般の人も講義に参加できる「オープン講座」とした。

５）講師の依頼及び打合せ

依頼する際に、“きんちゃい みまさかれっじ”の活動内容、対象者、目的、日程、講義の時間について説明し、講師の承諾を得、今後の打ち合わせや講義内容について検討した。講義内容は、受講者が楽しく学べる内容を事前に学生で検討し、いくつか具体的なものを講師に提案し、難易度も考慮し両者で検討した。また、全体の打ち合わせ会で活動内容について再度全員で確認を行い、各講義の目的、講義内容について共有を行った。講義がより良いものになるよう、意見交換が活発に行われた。また、講義前のオリエンテーションで使用する講師紹介の内容や講師の顔写真の撮影等も行った。

６）前日リハーサル

当日の流れについて協力を得ている薬師寺研究室の３年生も含めて確認を行った。当日使用する教室の掃除やセッティングを行った。また、再度講義で使用する資料やスタッフとサポーターの役割についても確認を行った。

３－３　“きんちゃい みまさかれっじ”の実践

幅広く受講生を募集したが、受講者は３名であった。

１）入学式

前期１日目の講義前に入学式を行った。開会のあいさつ等があり、その後“きんちゃい みまさかれっじ”のオリエンテーションを行った。

２）前期１日目

講義名	受講生	サポーター	スタッフ
文化人類学（全体講義）	3名	3名	13名
音楽（選択講義）	2名	2名	7名
英語（選択講義）	1名	1名	6名

時間	内容
10:00～10:30	受付
10:30～10:50	オリエンテーション
10:50～11:00	入学式
11:00～12:00	全体講義「文化人類」
12:00～13:00	昼休み
13:00～13:10	教室移動
13:10～14:10	選択講義「音楽」「英会話」
14:10～14:20	移動・休憩
14:20～14:40	アンケート
14:40～15:00	反省会
15:00	終了

①全体講義「文化人類学」

目的：様々な国の文化を知り教養を増やす

講師：桐生和幸先生（美作大学）

内容：「文化人類学とは何か」をテーマに、南アジアの生活文化、衣装文化、食文化について学んだ。講義と共に、様々な国の香辛料の匂いを嗅いだり、異文化の民族衣装を試着したりする等、体験的に学び楽しめたようだった。

②選択講義「音楽」

目的：音楽に興味を持ってもらい、全員で一つの音楽

を奏でることによって、達成感を味わってもらうこと
講師：工藤千晶先生（美作大学）
内容：ヴィバルディの「四季」のメロディに合わせて受講者が大太鼓、鉄器・木琴等好きな楽器を手に取り、全員で合奏した。合奏後に「四季」に隠された背景を、資料を基にして学んだ。次に「世界にひとつだけの花」を合奏した。講師の弾くピアノのメロディに合わせ、様々な打楽器でリズムを刻んだり、それぞれが自由に演奏したりする時間もあり、受講者とサポーター、スタッフ全員が一緒となって楽しむことができた。その後、発声練習、数回の合唱を行い、最後に「世界に一つだけの花」を各自好きな打楽器で、リズムを刻みながら合唱と合奏を行った。その様子をビデオで撮影し、1日目最後の反省会で披露した。参加した受講者は、楽器に触れることがとても楽しかったという感想もあり、充実した時間を過ごすことが出来たようだった。

③選択講義「英語」
目的：英語を楽しく学べるということを実感してもらう
講師：エリック・ランボー先生（津山工業高等専門学校）
内容：英語で自己紹介を行った後に全員で英語の歌を歌った。また、動物の写真が描いてあるカードをめくり、英語で書いてある動物の鳴き声を声に出し、動物を当てるゲームを行った。最後に、1日目最後の反省会で英語を使って自己紹介ができるよう、指導のもとで練習を行った。全員が英語で自己紹介をすることができ、楽しんで受講できていた。

写真：前期の様子

3）前期2日目

講義名	受講生	サポーター	スタッフ	食物学科スタッフ
料理(全体講義)	3名	3名	14名	7名

時間	内容
10:00～10:30	受付
10:30～11:00	オリエンテーション
11:00～13:00	全体講義 「料理」
13:30～13:40	教室移動・休憩
13:40～14:00	アンケート記入
14:00～14:30	レクリエーション
14:30～14:50	反省会
14:50	終了

①全体講義「料理」
目的：全員で協力して調理し、達成感を持ってもらう
講師：森本恭子先生（美作大学）、食物学科学生7名
内容：食物学科の学生からの栄養学の講義後、各調理台に受講者1名、サポーター1名、スタッフ2名、食物学科学生1名で手順表を基にカレーライス、グリーンサラダ、ドレッシング作りを行った。具材を型抜きする等、各調理台で個性が出るように工夫した。料理が得意、不得意な受講者も、サポーターとスタッフと協力して楽しくおいしい料理を作ることができた。

4）後期1日目
今年度の受講希望者が3名と少なかったため、後期については聴講のような形で、興味のある講座だけに参加できるよう「オープン講座」として受講者を募集した。オープン講座として、後期1日目の午後の講座のみ1名の参加があった。

講義名	受講生	サポーター	スタッフ
工作(全体講義)	3名	3名	14名
悪徳商法対策(全体講義)	4名	4名	13名

時間	内容
10:20～10:40	受付
10:40～10:55	オリエンテーション
10:55～11:00	教室移動
11:00～12:00	全体講義 「工作」
12:00～13:00	昼休み
13:00～15:00	全体講義「悪質商法対策講座」
15:00～15:05	休憩
15:05～15:15	アンケート
15:15～15:30	振り返り
15:30	終了

①全体講義「工作」
目的：生活に役立つ作品を作ろう
講師：中田稔先生（美作大学）
内容：プッシュカラーステンドを作成し、作品の下に来年のカレンダーを貼り付け、世界に一つのオリジナルカレンダーを作成した。事前に難易度の異なる絵を4種類用意し、受講者が選択し、その絵を基にプッシュカラーステンドを作成した。作成方法について丁寧な説明が行われた後、各自で作成した。作成時間が短く、完成できなかった受講者もいたが、全員が集中して作成し楽しむことができた。
②全体講義「悪質商法対策講座～あきらめない～」
目的：消費者教育を通して、消費者の自立を図る
講師：左古久代先生、森繁樹先生（P&A 大阪）
内容：他己紹介後、訪問販売業者による悪質商法が家に来るという内容の台本を用いてロールプレイを行った。自分が悪質商法に遭った時の対処方法をロールプレイを通して学んだ。その後、2グループに分かれて騙された経験の有無や、悪質商法にあった時の相談場所等を話し合うグループワークを行った。
5）後期2日目
受講生2名が欠席(別行事のため)となった。また、島根大学から7名の学生と教員1名が見学として参加した。

講義名	受講生	サポーター	スタッフ	島根大学スタッフ
科学実験(全体講義)	1名	1名	9名	7名

時間	内容
10:20～10:40	受付
10:40～10:55	オリエンテーション
10:55～11:00	教室移動
11:00～12:00	全体講義「科学実験」
12:00～12:10	アンケート
12:10～12:20	卒業式
12:20	終了

写真：　後期の様子

①全体講義「科学実験」
目的：生活にある“不思議”について実験を通して理解し、興味・関心を持ってもらう
講師：藤本忠男先生・中道雄大先生（新見市立井倉小学校）
内容：アルコールを使った実験や静電気を実際に感じてみる実験・音を体で感じる実験・カルメ焼き等を行い、身近にある不思議を実際に体験し感じ取ってもらうものであった。受講者、サポーター、スタッフ、島根大学スタッフも一緒になり、科学の不思議を体験し楽しんで受講することが出来た。
6）卒業式
2名が欠席であったため全課程を修了した1名の受講者が卒業となった。島根大学の見学もあり、にぎやかな卒業式となった。

写真　　卒業式の様子

4．学生によるオープン・カレッジの実践結果

4－1　受講者アンケートの結果

各講義終了後に講義の内容や感想、要望についてアンケート実施した。
1）講義について
≪講義を受けてみてどうだったか≫
文化人類学：「難しかった」2名、「ちょうどよかった」1名
英会話：「ちょうどよかった」1名
音楽：「簡単だった」2名
料理：「ちょうどよかった」1名、「簡単だった」2名
工作：「難しかった」1名、「ちょうどよかった」2名
悪質商法対策講座～あきらめない～：「難しかった」1名、「ちょうどよかった」2名
科学実験：「簡単だった」1名
≪今回、受けた講義は生活に役に立つと思うか≫

文化人類学：「とてもそう思う」1名、「思う」2名
英会話：「とてもそう思う」1名
音楽：「思う」2名
料理：「とてもそう思う」2名、「思う」1名
工作：「とてもそう思う」3名
悪質商法対策講座〜あきらめない〜：「とてもそう思う」4名
科学実験：「思う」1名
≪講義の進む速さはどうだったか≫
文化人類学：「速かった」1名、「ちょうどよかった」2名
英会話：「ちょうどよかった」2名
音楽：「ちょうどよかった」2名
料理：「速かった」2名、「ちょうどよかった」1名
工作：「速かった」2名、「ちょうどよかった」1名
悪質商法対策講座〜あきらめない〜：「速かった」2名、「ちょうどよかった」2名
科学実験：「ちょうどよかった」1名
≪講義内容について興味を持てたか≫
文化人類学：「少し興味が持てた」3名
英会話：「興味が持てた」3名
音楽：「興味が持てた」3名
料理：「興味が持てた」3名
工作：「興味が持てた」2名、「少し興味が持てた」1名
悪質商法対策講座〜あきらめない〜：「興味が持てた」1名、「少し興味が持てた」3名
科学実験：「興味が持てた」1名
2）感想や要望について
自由記述で記載してあったので、記述の通りに表記する。
前期
≪今後どのような勉強がしてみたいですか≫
Aさん　：「しょうらいはどくりつできるように洗濯、アイロン、りょうりのべんきょうをして生活のくらしの勉強がしてみたい。」
Bさん　：「音楽をしたい。」
Cさん　：「遊び、美術。」
≪2日間を通しての感想を教えてください≫
Aさん：「桐生和幸先生が文化人類学のべんきょうをとても分かりやすくおしえて下さったのが良いけいけんになりました。人類学について桐生先生のじゅぎょうをおそわりたいと思いました。5月23日の土曜日のちょうり実習でカレーライスとグリーンサラダを作り、みんなで食べました。いちばんおいしかったのはグリーンサラダがおいしく作れてドレッシングもおいしかったです。カレーライスもおいしく作れてみんなが「おいしい」って言ってくれた事がすごくうれしかったです。ありがとうございました。またりょうりがしたいです。」
Bさん：「カレーはとてもおいしくできてとてもよかったです。じゃがいもを切る時にねこの手で切るのを頑張りました。カレーのルーを入れるときにやけどをしないようにするのを頑張りました。5人で協力して調理ができてよかったと思います。」
Cさん：「大学生の人と話せてよかった。やさしい人、おもしろい人がいて楽しかった。」
後期
≪今後どのような勉強がしてみたいですか≫
Aさん：「ノートパソコン、にんげんかんけいのべんきょう、男子と女子のふれあいのべんきょう、コーラス。」
Bさん：「また工作の切りぬきがしたいと思います。また音楽がしたい。」
Cさん：「美術、パソコン。」
Dさん：「とくにないです。」
≪2日間を通しての感想を教えてください≫
Aさん：「5月16日、5月23日、11月14日、11月28日の4日間みまさかだいがくでみまさかれっじにさんかできていろんなべんきょうができた事を学んできたことを生かしながらさくらワークで仕事をがんばります。たかすさんさいごの日までサポータをしてくださり本当にありがとうございました。らいねんもみまさかっじにさんかさせて下さい。よろしくおねがいします。」

4－2　アンケート及び感想、要望のまとめ

前期は講義の内容に興味を持ち、楽しく学ぶことができたという意見や、今後の生活に役立つといった回

答が多く、全体的に良い感想が多かった。しかし、「速かった」や「難しい」と感じている受講者もおり、集中力が切れてしまった時のサポーターやスタッフによる声掛けやサポート方法について考える必要がある。後期は、受講者が楽しそうに参加しており、これからの生活に役立つと思うという意見が多くあがったが、講義が少し難しかったという意見もあった。作業が難しいと感じていた受講者へのサポーターやスタッフの配慮方法を工夫していく必要がある。

4－3　前期のまとめ及び課題

前期日程を通して、“きんちゃい みまさかれっじ”の全体像を体験的に理解することができた。受講者の人数が3名であり、少人数でも参加してよかったと思える講義内容となるよう工夫する必要があった。また、受講者の「来てよかった」、「また参加したい」という感想を得られるようにするには、サポーター、スタッフのサポートがとても重要であることが分かった。受講者を理解し対応することも回数を重ねるごとに掴むことができ、配慮点も明確になったと考える。特に、2日目の講義「料理」では、講師だけでなく、他学科の学生の力を借りて、無事に終えることができた。様々な人の支援を得て、“きんちゃい みまさかれっじ”が実施できていると改めて実感することができた。

課題として、前期日程の講義内容の中には、受講者にとって少し難しい点があったり、視力の弱い受講者からは「資料が見にくかった」という意見があった。また、講義のペースが速いことや、配布資料のルビが抜けていることもあり、講義内容を理解できていないこともあった。スタッフが事前の準備に抜けているところがないかを再確認しておく必要がある。そして、常にサポーター、スタッフ自身がその場に応じて臨機応変に対応できるよう努めていく必要がある。前期はサポーターやスタッフ側の課題が明らかになり、後期に活かしていきたい。

4－4　後期のまとめ及び課題

後期は日程が合わず、受講者数が少ないことから選択講義を行わず、全て全体講義とした。前期の課題として出てきていた、受講者との関わる中で留意する点に注意しながら、サポーター、スタッフが関わることができた。後期は外部の講師が多く、打ち合わせ等が当日しかできず、スタッフが内容を把握していないこともあった。担当スタッフが講義内容や受講者、サポーター、スタッフの動向を把握しておく必要があった。また、受講者とサポーター、スタッフが工作を行う際等、受講者に目が行き届いていない場面が見られた。サポーターやスタッフの配置場所や受講者への気を配り方等の課題もあがった。後期日程を終え、受講者数が少なかったが、受講者から「また参加したい」という言葉を聴くことができ、楽しく受講してもらえたようだった。

5．実践をふりかえって

5－1　課題

1）受講者の募集方法

今回のオープン・カレッジは受講者が少なかったことが大きな課題である。今回の受講者は日中活動の事業所からフライヤーを渡してもらい、案内を受けて参加を決めたとのことであった。津山市内の事業所や県南の事業所にフライヤーを配布した際、支援者には“きんちゃい みまさかれっじ”について説明したが、対象となる本人への説明ができていなかった。そのため、本人へ情報を伝えられなかったことも、受講者が集まらなかった理由の一つと考える。また、実施日が土曜日であったため、事業所の活動日と重なってしまうケースが多く、事業所も利用者への告知を控えてしまうことも考えられる。他にも、遠方であることから、津山市以外の受講者の参加が難しかったと考える。

2）受講者との関わり方

受講者が必要としている時にサポーターが対応できないことがあった。また、サポーターと受講者がどの程度の距離を持って接するべきか、受講者とどのように関わればよいか等が難しかった。

3）講師との連絡調整

大学内の講師とは直接会って打合せができたにも関わらず打ち合わせが不十分であったと実施当日に感じることがあった。また、外部の講師との連絡方法は電

話かメールとなってしまうため、詳細な打ち合わせが難しいということが課題である。さらに、実験等の講義の場合、遠方の講師は講義室を直接確認することも難しい。学内、学外の講師いずれも連絡を密に取り合い、参加者の詳しい情報を事前に伝えることが必要である。

5－2　課題の改善に向けて

1）受講者の募集方法

課題から、事業所等を通して募集をする場合、支援者だけにフライヤーを渡し説明するのではなく、詳しい内容について対象者本人に向けて説明を行う必要がある。また、津山市内だけでなく、近隣市町村の事業所、当事者の会、社会福祉協議会や市役所等へのフライヤーの配布や、ポスター掲示もお願いすることも必要である。他にも、新聞や地域広報誌、大学のホームページ等に取り組みを掲載してもらうことも地域住民の認知を広げられると考える。

2）受講者との関わり方、配慮する点

サポーターと受講者の関わり方、サポーターではない、スタッフと受講者との関わり方を再考する必要がある。受講者の情報をできるだけ事前把握し、個々にどのような支援や配慮が必要なのかを考えておく必要がある。また、支援や配慮をサポーターやスタッフで共有するための方法についても具体的にしておく必要がある。

3）講師との連絡調整

事前に講義内容や講義の時間配分、資料のルビ等の配慮を行えるよう入念に打合せを行う必要がある。また、講師に受講者の特性等についても、事前に伝えることも必要である。学内の教員に講師を依頼する場合は、前期に行った「打ち合わせ会」を設けることが必須である。学外の講師へは、電話やメールでは難しいことも多々あるが、確認すべき内容を事前にまとめておくこと、受講者情報や内容の変更や追加がある際は随時連絡することを怠らないことが必要である。また、講師担当スタッフだけでなく全員が把握できるように資料としてまとめることも必要である。

5－3　まとめ

“きんちゃい みまさかれっじ”の活動を通して、オープン・カレッジを作り上げていく大変さや、受講者が学んだ事を実際の生活で活かしてもらえるよう、講師と打ち合わせを重ね、受講者の立場になって講義内容考えることの大切さを学ぶことができた。また、サポーターやスタッフとして準備や支援を行うことを通して、受講者の想いを尊重して支援をしていく大切さと難しさを体験することができた。“きんちゃい みまさかれっじ”を実践し、多くの学びを得るとともに、我々自身が成長できたと感じられた。今後も“きんちゃい みまさかれっじ”が実践され、定着していけるよう引き継がれていくことを期待している。

“きんちゃい みまさかれっじ”の実践にあたり、各講師の先生方、多くの関係者の方々にご協力をいただきました。心よりお礼申し上げます。

参考文献等

1）建部久美子編（2001）「知的障害者の生涯教育の保障－オープン・カレッジの成立と展開」，明石書店.

2）杉本正・兼松美幸（2010）「実践報告『オープン・カレッジの展開』」，帝塚山大学心理福祉学部紀要.

3）石飛猛・武田英樹（2004）「播磨地域における知的障害者の生涯教育の現状と今後の課題－知的障害者オープン・カレッジの取り組みから」，賢明女子学院短期大学研究紀要.

4）米倉裕希子（2011）「知的障害のある人への心理教育的アプローチに関する研究－中播磨地区手をつなぐ育成会当事者研修の実践報告－」，社会福祉学部研究紀要.

5）狩野晴子（2012）「知的障害者を対象としたオープン・カレッジの成果と課題～第一回『はぴねす☆EIWA カレッジ』の実践から～」，静岡英和学院大学紀要.

6）薬師寺明子・岡幸代・岡本章裕・定兼めぐみ・春名佑二・神谷結泉・安田大輔（2009）障害や障害

のある人への理解を広める取り組みの向上をめざして－地域住民への意識調査から－．美作大学・美作大学短期大学部紀要 第54号，87-95.
7）薬師寺明子（2010）学生における障害者理解を広げる取り組み－美作福祉部隊リカイヒロメタインジャーの活動を通して－．美作大学・美作大学短期大学部 地域生活科学研究所所報 第7号，30-33.
8）薬師寺明子・杉谷理絵・竹内瞳・富澤真菜・新延優子・真壁かおる・山本詠美・吉元めぐみ(2010)知的障害者における本人活動への支援～「本人の会」立ち上げに向けて～．美作大学・美作大学短期大学部紀要 第55号，91-100.
9）薬師寺明子・大橋瑛美・落裕嗣・小松和真・森田麻琴（2015）美作地域における障害者就労支援サービスの創出－就労継続支援で行う“買い物支援”－．美作大学・短期大学部紀要 第60号，55-64.
10）薬師寺明子他（2016）発達障害者を対象としたオープン・カレッジ1．美作大学・美作大学短期大学部 地域生活科学研究所所報 第13号，43-45．等